

「聖母の庭」

辻 基倫子 山梨県甲府市 五十一歳

五月のある晴れた朝、玄関を開けるとすぐ、藤の花の大波が打ち寄せてきた。私が嫁いだばかりの年、初めてこの光景を目の当たりした時には目が眩みそうになった。

私の実家には庭がなかった。だから、庭の手入れの仕方がわからない上、夜遅くまでの残業がある勤めに出ており、勢い、義理の母にほとんどのことを任せっ切り、という状態になった。私が「申し訳ない」と言うといつも義母は笑い「自分の楽しみでやってるんだから、いいのよ」と言ってくれる。帰宅した時、庭の草花を挿した小瓶が玄関に飾ってあると、その日一日で一番美しいものを見た気持ちになる。私は趣味の俳句でその感動を表現し、新聞社に投稿するようになった。

ある年の夏、私の俳句が不調になり、新聞に掲載されないことがあった。家族みんなで食事した後、義母と食事の片付けをしていたら、義母はこう言った。「今年は紫陽花がとてもきれいよ。片付けはいいから、見てきてごらんよ。」と言った。それを聞いて、私は、義母がいつも新聞の私の句を見ってくれ、私の句に役立つように、切り花を玄関に飾ってくれていることに気付いた。義母の丹精の紫陽花はどこまでも深い紫紺色だ。

濃あじさゐマリアの青衣よぎる夢

この句がこの次の週の新聞に載った時、義母が見せた笑顔こそが「マリア」だと思った。